

# カナダにおける政党システム変化の考察 —1990年代以降の事例から

木 暮 健太郎

## 1. はじめに

政党システムの変化という点において、近年、カナダは興味深い事例を提供してきたといえる。その理由の1つは、とりわけ1990年代以降、約30年の間に顕著な政党システムの変化を経験してきたからである<sup>1)</sup>。

まず、1993年に行われた選挙<sup>2)</sup>で、カナダにおいて長年にわたって維持されてきた「2か2分の1政党制」(two and a half party system) から多党制 (multi-party system) へと変化した<sup>3)</sup>。その後、20年近くにわたり、基本的には多党制が維持されてきたが、2011年の選挙や、直近に行われた2015年の選挙では、再び2か2分の1政党制へと回帰する傾向がみられたのである。

カナダでは、選挙での大規模な議席数の変動を伴いながら、政党システムが変化してきた。どのような変化であったのか、なぜ、このような変化が生じたのかを検証することは、政党システム研究の分野における研究蓄積の1つとなるだろう。そこで本稿では、近年のカナダにおける政党システムの変化について、量的な変化を測定するいくつかの指標を用いて考察し、さらには有権者と政党との結びつきにおける変化についても、政党システム論のフレームワークを参照しながら検討していくこととする。

## 2. 1990年代以降の選挙

### 2.1 1993年選挙のインパクト

1993年10月25日に行われた選挙は、カナダ政治においても未曾有の結果をもたらした。選挙や政党システム分析において、1つの分水嶺となったともいわれる選挙である<sup>4)</sup>。この選挙は、さまざまな変化を伴うものであったが、まず大きな出来事として、与党であった進歩保守党 (Progressive Conservative Party of Canada)<sup>5)</sup> が前回選挙で獲得した169議席からわずか2議席へと転落したことが挙げられる。小選挙区制は、その制度的なメカニズムの特性から、ときに極端な選挙結果をもたらすとはいえ、これほどまでに劇的な議席数の減少は、他の先進諸国においても極めて稀であろう。一方、改革党 (Reform Party) とケベック連合 (Bloc Québécois) という新しい政党が多くの議席を獲得し、それぞれ2大野党として急速にカナダ政治の表舞台に登場した。また、長年にわたりカナダで第3党の地位を維持してきた新民主党 (New Democratic Party) は、9議席しか獲得できず、公式政党 (official party status) としての立場を失うこととなった<sup>6)</sup>。結果として、従来の3政党から、5つの政党による競合へと変化したことになる。

また、改革党とケベック連合が獲得した議席が、地域ごとにかなりの偏りを見せたことも、1993年選挙を特異なものとする要因となった。表1は、1993年選挙における地域ごとの獲得議席数を表している<sup>7)</sup>。表1から明らかのように、野党第1党となった改革党は、獲得議席のすべてを西部地域から得ているが、他の地域では1議席も獲得していない。他方、野党第2党となったケベック連合に至っては、そもそもケベック州でしか候補者を擁立せず、44議席のすべてを同州から得ている。つまり、この2つの政党は、主要な野党勢力であるにも関わらず、全国的に広く支持を集めたわけではなく、それぞれの政党が、それぞれ特定地域でのみ支持されたことを示している<sup>8)</sup>。少なくとも、過去において、このような地域的な「分断」ともいえる状況は存在しなかった。

カナダにおける政党システム変化の考察

表1 地域ごとの獲得議席（1993年選挙）

地域	東部				中央		西部				準州	合計
	NL	PE	NS	NB	QC	ON	MB	SK	AB	BC	準州	
自由党	4	4	0	3	26	101	6	1	2	6	2	155
改革党	0	0	0	0	0	0	3	8	24	25	0	60
ケベック連合	0	0	0	0	44	0	0	0	0	0	0	44
新民主党	0	0	6	2	0	0	4	5	0	3	1	21
進歩保守党	3	0	5	5	5	1	1	0	0	0	0	20
その他	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
計	7	4	11	10	75	103	14	14	26	34	3	301

出典：Elections Canada より筆者作成。

NL: ニューファンドランド・ラブラドール州 PE: プリンス・エドワード・アイランド州 NS: ノヴァ・スコシア州 NB: ニュー・ブランズウィック州 QC: ケベック州 ON: オンタリオ州 MB: マニトバ州 SK: サスカチュワン AB: アルバート BC: プリティッシュ・コロンビア 準州: 北西準州・ユーコン準州

なお、改革党とケベック連合が台頭した背景の一つとして挙げられるのは、主として大敗した進歩保守党が行ってきた政治への不満である。進歩保守党は、1960年代から一貫して続いてきたケベック・ナショナリズムと、そのムーブメントを背景として、カナダからの独立を目指そうとするケベック州への対応として、同州に大幅な自治権を与えて国家からの離脱を回避させようとした。具体的には、憲法の改正に取り組み、ケベックが「特別な社会」(distinct society)であることを明記した新しい憲法を生み出そうとした。しかしながら、ケベック州だけを特別扱いしようとするのが他の州からの反発を招き、結果として憲法改正案は廃案となった<sup>9)</sup>。こうした政治的な失敗は、ケベック州における政府への根強い反感や失望をもたらしただけではなく、とりわけ英語話者（アングロフォン）の多い西部地域でも著しい不信感を生み出すこととなった。そして、1993年の選挙では、与党であった進歩保守党が大幅に議席を失い、一方において、改革党とケベック連合という新しい政党が、与党への不満を吸収するかたちで躍進を遂げたのである。

なお、1993年選挙で進歩保守党にかわって与党となった伝統的な全国政党である自由党（Liberal Party of Canada）もまた、地域的に支持が偏っていた。自由党が獲得した全議席の7割近くがオンタリオ州から得たものであ

り、オンタリオ州とケベック州を合わせた中央カナダでの議席は、自由党の全議席のうち8割を占めていた。対照的に、西部地域において自由党は議席を伸ばすことが出来ず、マニトバ州を除くすべての州で改革党を下回る議席しか獲得することはできなかった。

カナダの政治史において、一度の選挙で与党が壊滅的な敗北を喫し、新しい2つの政党が台頭したことは、極めて大きなインパクトを持ちうる結果であった。さらにいえば、新しく登場した政党の支持基盤が特定地域に著しく偏っていたことは、1993年の選挙を特徴づけるものであり、この選挙以降のカナダ政治を方向づけることとなったのである<sup>10)</sup>。

## 2.2 1993年以降の動向

### ① 多党化の定着

1993年選挙以降、直近の2015年選挙まで、7回の選挙が行われてきた。選挙結果に着目すると、1993年選挙で生じた政党間競合は、基本的にはしばらくの間、維持されることとなった。すなわち、リベラル派の自由党、保守派の進歩保守党と改革党、中道左派の新民主党、そしてケベック州の代表としてのケベック連合という5つの政党による競合である。表2からも明らかのように、1993年から2004年までの間、こうした政党間競合が維持されてきたことが分かる。

まず、改革党は1997年選挙、2000年選挙と徐々に議席を増加させることに成功し、特に西部地域の利益を代表する政党へと発展した。ケベック連合についても、議席数の増減はあるものの、1997年以降もケベック州において一定の勢力を保ち続けた<sup>11)</sup>。一方、1993年選挙で議席を大幅に減少させた新民主党も消滅の危機は免れ、とくに東部カナダ地域を代表する政党として生存し続けてきた。

### ②保守合同

こうした政治状況に変化がもたらされる契機となったのは、2003年の

カナダにおける政党システム変化の考察

表2 1945年から2015年までの選挙結果

選挙年	自由党	進歩保守党/ 保守党*1	新民主党*2	ケベック連合	改革党*3	社会 信用党	その他	合計
1945年	125	67	28			13	12	245
1949年	190	41	13			10	8	262
1953年	171	51	23			15	5	265
1957年	105	112	25			19	4	265
1958年	48	208	8			0	0	265
1962年	99	116	19			30	1	265
1963年	129	95	17			24	0	265
1965年	131	97	21			5	11	265
1968年	155	72	22			0	15	264
1972年	109	107	31			15	2	264
1974年	141	95	16			11	1	264
1979年	114	136	26			6	0	282
1980年	147	103	32			0	0	282
1984年	40	211	30			0	1	282
1988年	83	169	43			0	0	295
1993年	177	2	9	54	52	-	1	295
1997年	155	20	21	44	60	-	1	301
2000年	172	12	13	38	66	-	0	301
2004年	135	99	19	54	-	-	1	308
2006年	103	124	29	51	-	-	1	308
2008年	77	143	37	49	-	-	2	308
2011年	34	167	102	4	-	-	1	308
2015年	184	99	44	10	-	-	1	338

出典 Elections Canada より筆者作成。網掛けは与党となったことを表している。

\*1 進歩保守党は2003年にカナダ同盟(旧改革党)と合併し、保守党となった。したがって、2004年選挙の議席は、保守党としての議席である。

\*2 新民主党は1961年に現在の政党名となった。それ以前の名称は、協同連邦党である。

\*3 改革党は2000年にカナダ同盟と政党名を変更した。

「保守合同」(Unite the Right) である。進歩保守党の不人気を吸収するかたちで台頭した改革党であるが、1993年以降、与党の座を独占してきた自由党を破り、政権を獲得するだけの議席を獲得するためには、西部カナダだけではなく、特に大票田でもあり、州ごとに割り当てられた議席数の多いオン

タリオ州でも支持される必要があった。しかし、改革党の掲げる二言語・多文化主義の見直しは、移民が多く、また穏健な有権者が多いとされるオンタリオ州で支持を広げることができなかった。そこで、改革党の創始者でもある党首のマニング（Preston Manning）は、進歩保守党との右派合同をめざし、よりマイルドな保守政党へと転換を図るため、2000年にはカナダ同盟（Canadian Alliance）へと党の名称を変更した。

やがて、紆余曲折を経ながらも、2003年12月にカナダ同盟と進歩保守党との合併が成立し、「保守党」が誕生した。合併後、初の選挙となった2004年の総選挙では政権交代にいたらなかったものの、保守党は99議席を獲得し、野党第1党となった<sup>12)</sup>。この選挙で少数派政権に追い込まれた自由党の政権運営は行き詰まり、保守党をはじめとする野党が内閣不信任案を提出して可決されたため、2006年には再び選挙が行われた。その結果、少数派ながらも保守党が政権に就き、13年ぶりに政権交代が起こった。以降、保守党は少数派政権による不安定な政権運営を続けてきたが、2011年の選挙では、ようやく過半数を獲得し、安定した状況を獲得するに至った<sup>13)</sup>。

表3 右派合同に向けた政党の動きと合同後の状況

年月	政党の動き
1987年10月	マニングが改革党を結成。初代党首となる。
1993年10月	改革党は初めて議席を獲得。52議席と躍進した。
1997年6月	改革党は60議席を獲得。野党第1党へ。
2000年1月	進歩保守党との右派合同を目指し、「カナダ同盟」へと党名を変更した。
2000年11月	カナダ同盟は66議席を獲得し、改革党以来、過去最高の議席数となる。
2002年3月	ハーバーがカナダ同盟の党首となる。
2003年12月	カナダ同盟と進歩保守党が合併し、「カナダ保守党」が誕生した。
2004年3月	党首選により、ハーバーがカナダ保守党の初代党首となる。
2006年1月	保守党は124議席を獲得し、少数派ながらもハーバー政権が誕生した。
2008年10月	保守党は143議席を獲得し、引き続き政権を獲得した。
2011年5月	保守党は166議席を獲得し、単独過半数政権を獲得した。

出典：筆者作成。

### ③2015年選挙

保守党はカナダ国内の経済的な安定もあり、2006年以降、10年近く与党の座にあった。しかしながら、2015年10月19日に行われた選挙では、議席を大幅に失い、敗北することとなった<sup>14)</sup>。一方、前回の2011年選挙で過去最低となる34議席まで議席を減少させていた自由党は、2013年に新しく党首となった若いトルドー（Justin Trudeau）による個人的な人気も下支えとなり、前回から150議席増の184議席を獲得し、与党に返り咲くことに成功した。

また、前回の選挙で103議席を獲得し、野党第1党にまで勢力を拡大した新民主党は、今回の選挙で59議席を失い、44議席の獲得にとどまった。結果として、第3勢力という、いわば新民主党の「指定席」に戻った状況である。そしてケベック連合は、近年、衰退傾向にあり、今回の選挙でも10議席を獲得するにとどまった。

政党間の競合という点では、自由党と保守党が2大政党として位置し、新民主党が第3勢力にあるという状況は、まさに、かつてのカナダにおける伝統的なスタイルである。いずれにせよ、選挙結果という点だけで見ても、1993年選挙から2015年の選挙に至るまで、かなりの変動が見られたことは明らかである。では、こうした変化は、政党システムという観点では、どのように捉えることが可能なのであろうか。

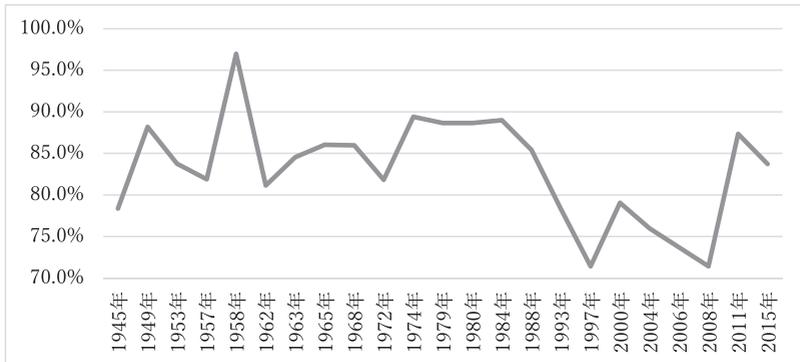
## 3. 政党システム変化の指標

### ①議席占有率

前述のように、カナダは、自由党と進歩保守党という2大政党に加え、第3勢力である新民主党を加えた3つの政党が全国的な政党として存在してきたことから、「2か2分の1政党制」とされてきた。政党システムの研究者であるウェア（Alan Ware）の定義によれば、2か2分の1政党制とは、(a) いずれの政党も過半数の議席を獲得できない傾向にあり、(b) 2つの主要政党

の議席率が80%程度であって、(c) 2大政党以外の政党が一定程度の議席を獲得しているケースだという<sup>15)</sup>。

ウェアの定義をカナダの事例に適用してみると、与党となる政党は、おおむね過半数の議席を獲得してきたので、この点で逸脱してはいるが、図1からも明らかなように、1945年から1988年までの期間、自由党と進歩保守党による2大政党の議席占有率は、80%台で推移してきた。また、カナダではつねに第3勢力の政党が一定程度の議席を獲得し続けていたことから、政党システムのカテゴリーとしては、「2か2分の1政党制」であると分類できる<sup>16)</sup>。



出典：Elections Canada のデータより筆者作成。

図1 1945年から2015年までの議席占有率（主要2党）

しかし、カナダの政党研究者たちの多くが指摘するように、1993年の選挙後、カナダは多党制となった。この点について、主要2党の議席占有率の推移から考えてみたい。図1から指摘できることは、多少の例外はあるものの、主要2党の議席占有率が80%から90%の間で推移してきたという点である。一方、残りの10%から20%の議席は、主として新民主党のような第3勢力が獲得してきたことから、少なくとも2党制のカテゴリーにあり、より詳細に捉えるならば、「2か2分の1政党制」であった指摘できる。

そして、ここで注目したいのは、劇的な変化が生じた1993年の選挙から2008年の選挙まで、主要2党の議席占有率が80%を下回ってきたという点である。これはすなわち、主要政党が3から5に増加したこと、それぞれの政党が一定程度、議席を獲得してきたことを意味している。したがって、議席占有率からみても、やはり、1993年選挙以降、カナダが多党化してきたことを裏付けている。また、伝統的な2党制の枠組みに回帰したとされる2011年と2015年の選挙では、主要2党の議席占有率が再び80%台に戻っていることにも注目しておくべきだろう。

## ②有効政党数

次に、政党システム論において、政党の数をカウントする基準の1つとして用いられている有効政党数（effective number of parties）からカナダの政党システムを考えてみたい。有効政党数とは、ターゲペラ（Rein Taagepera）とシュガート（Matthew S. Shugart）が考案したものであり、各党の得票率をもとに、数えるに足る政党の数を把握するための指標である<sup>17)</sup>。なお、計算式は以下のとおりである。

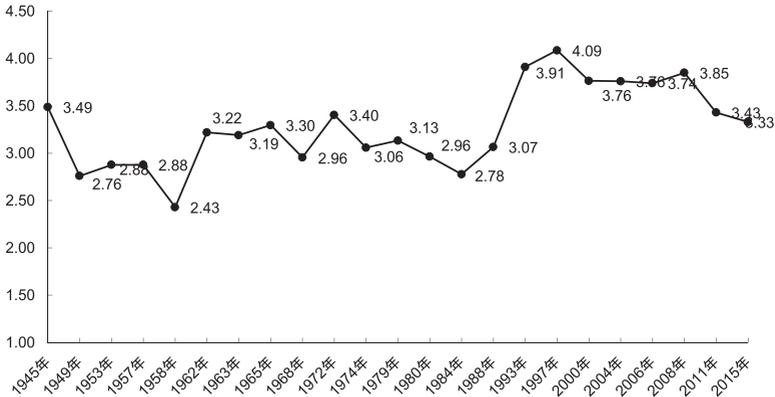
$$N = 1 / \sum p_i^2$$

各政党の得票率（ $p_i$ ）を二乗して総和を求め、その逆数を有効政党数とする

図2は、1945年から2015年の選挙までの期間、選挙における各党の得票率をもとに算出した有効政党数である。1945年から1993年に至るまで、カナダの有効政党数は2から3の間で推移してきたことが分かる。なお、この期間の有効政党数の平均値は3.03であり、限りなく3に近い値を示していた。この傾向からも、2党制というよりは、そのヴァリエーションの1つである2か2分の1政党制であったという議論とも一致している。

しかしながら、1993年の選挙から2008年の選挙まで、有効政党数は4に近い値となっており、この期間の平均値は3.85である。つまり、有効政党

数という観点からみても、カナダが2党制のカテゴリーではなく、むしろ多党制に近い政党システムであったと指摘できるのである。



出典：Elections Canada のデータより筆者作成。

図2 1945年から2015年までの有効政党数

興味深いのは、2011年選挙と2015年選挙において、有効政党数の値が減少し、かつての3という数値に近づいているという点である。とりわけ、2015年の選挙は、かつての2か2分の1政党制に回帰したと指摘されているが、有効政党数を見ても、そうした傾向を見て取ることができる<sup>18)</sup>。

### ③選挙ヴォラティリティ

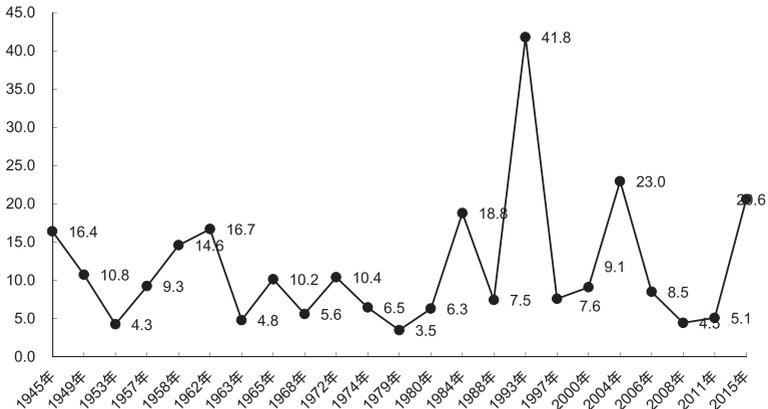
政党システムの変化を測定するもう1つの指標として、選挙ヴォラティリティ (electoral volatility) を挙げることができる。ヴォラティリティは、有効政党数のように、2党制から多党制への変化 (あるいはその逆) を測定するための指標ではないが、選挙毎の変化の大きさを把握するために用いられている。選挙ヴォラティリティは、ペデルセン (Mogens N. Pedersen) によって開発された指標であり、前後2回の連続する選挙における変化を測定するものである。用いられるデータは得票率であり、各政党が2回の選挙で

得た得票率の差をもとにして算出される<sup>19)</sup>。

$$V_t = \sum |P_{i,t} - P_{i,(t-1)}| / 2$$

$t$ 回目の選挙における各政党の得票率 ( $P_{i,t}$ ) と、前回選挙 ( $t-1$ ) での得票率の差 (絶対値) を総和し、2で割る

図3は、カナダにおけるヴォラティリティ値の変化を表している。有効政党数と同様に、1945年から1988年までの間、ヴォラティリティ値に極端な変動は見られていない。しかしながら、1993年選挙におけるヴォラティリティ値は41.8となり、過去に例をみないほど、急激な変化であったことを示している。ヴォラティリティ値が高まった理由としては、進歩保守党が2議席にまで激減したこと、新しく登場した2つの政党が多くの議席を獲得したことが挙げられる。2回の連続する選挙における得票率の増減をもとに計算するという性質上、新たに登場した政党の得票率が比較的に高ければ、結果としてヴォラティリティ値も上昇することになるからである。



出典：Elections Canada のデータより筆者作成。

図3 1945年から2015年までの選挙ヴォラティリティ

ここまで、カナダにおける政党システムの変化を量的に捉えるために、主要2党の議席占有率、有効政党数、そして選挙ヴォラティリティから考察してきた。結論として、いずれの指標からも、1993年選挙以降、何らかの変化が生じていたことを確認できた。そこで次に、なぜ、このような変化が生じたのかについて検討するために、カナダにおける政党と有権者との関係や、歴史的な政党システムのパターンといった観点から考察したい。

#### 4. 政党システム変化の考察

政党システムやその変化は、政党の数だけではなく、有権者と政党との関係性からも捉えられる分析概念である。この点に関して、政党システムにおける「編成」(alignment) と「脱編成」(dealignment) という視点が存在する<sup>20)</sup>。編成とは、イデオロギーや言語、宗教など、それぞれの利益を代表する政党と有権者とが強固に結びついている状態を表している。一方、脱編成とは、政党と有権者との間に明確で持続的なつながりが存在せず、選挙毎の支持変動が大きい状態を意味している。さて、こうした編成や脱編成という点に関して、カナダの政党システムはどのように捉えることが可能であろうか。

カナダの政党や投票行動を分析してきたルデューク (Lawrence LeDuc) によれば、カナダは基本的に脱編成 (dealignment) であると指摘している。彼によれば、カナダでは、つねに大規模な変化が生じやすいという<sup>21)</sup>。したがって、1993年選挙の結果をふまえながらも、ルデュークは、有権者と政党との間に新たな編成がみられているわけではないと捉えている<sup>22)</sup>。むしろ、カナダにおいて投票行動に影響を及ぼすのは、地域や言語などの要因を含む「長期的な影響力」(long-term forces) ではなく、選挙における争点や、政党あるいは政党のリーダーに対するイメージといった「短期的な影響力」(short-term forces) であるという<sup>23)</sup>。短期的な影響力に強く左右され、また有権者が特定の政党と強く結びつけないために、選挙における変化の可能性がきわめて高いことになる<sup>24)</sup>。

カナダの有権者が移ろいやすい性質をもっているのか、それとも地域的な利害などによって有権者と政党が結びついているのか否かについて、政党研究者の間でも意見が分かれてきた。例えば、ビッカートン (James Bickerton) やギャニオン (Alan-G. Gagnon) らの研究グループは、有権者の流動性は高いと認めながらも、地域や言語といったエスノカルチュラルな争点次元は、カナダの投票行動を分析するうえで重要であるとしている<sup>25)</sup>。ヤング (Lisa Young) やアーチャー (Keith Archer) らの研究者たちもまた、1993年以降、カナダの政党システムが地域主義 (regionalism) によって特徴づけられており、長期的な傾向となる可能性を指摘している。

カナダにおける政党システム研究の泰斗であるカーティ (Kenneth R. Carty) もまた、1993年選挙以後、カナダは新たな「第4の政党システム」のパターンを示しており、それは主に、地域主義によって特徴づけられ、地域的な利益と政党とが結びついていると述べる。すなわち、1993年選挙以降、ある種の「編成」が生じたという立場である。

そこでまず、カーティによる政党システム論について簡単に言及したい。カーティによれば、1867年のカナダ連邦形成以後、これまで3つの時期にわたって、異なる政党システムのパターンを経験してきたという<sup>26)</sup>。第1期は、1867年から1919年までであり、カナダは国家形成期にあり、保守党<sup>27)</sup>と自由党という2大政党が誕生した時期である。第2期は、1921年から1957年までであり、さまざまな移民が流入し、多様な利害を代表するために、既存政党が包括政党 (catch-all party) の方向に向かった時期である。第3期は、1963年から1988までであり、ケベック・ナショナリズムへの対応として、汎カナダ主義 (Pan-Canadianism) が重視された時期である (表4参照)。

そして第4期が、1993年以降の時期であり、これまでのカナダにはなかった政党間競合である。すなわち、従来、基本的には2大政党のどちらかが全国政党として、民族や文化、あるいは言語といった点で多様なカナダを統合する役割を果たしてきた。しかしながら、1990年代のカナダを特徴づけたのは、改革党とケベック連合という地域的な利害を明確に主張する政党

表4 カーティによる政党システムのパターン

政党システム	時期	時代的な特徴	概要
第1の政党システム	1867年～1917年	国家形成の時代	・国家形成期 ・英系と仏系による2大政党
第2の政党システム	1921年～1957年	ブロークレージ型の時代	・多様な移民の到来 ・包括政党化
第3の政党システム	1963年～1988年	汎カナダ主義の時代	・ナショナリズムの勃興 ・多文化主義
第4の政党システム	1993年～2008年	地域主義の時代	・地域利害の顕在化 ・多党化

出典：R. Kenneth Carty, William Cross, and Lisa Young, "A New Canadian Party System," in William Cross (ed.), *Political Parties, Representation, and Electoral Democracy in Canada*, Oxford, 2002, pp. 15-36. をもとに筆者作成。

の登場であり、1990年代から2000年代初頭に至るまで、その勢力を保ち続けたのである。

とはいえ、改革党が保守合同を経て2大政党の一翼へと吸収されていったこと、そしてケベック連合という、より明確な地域政党が衰退傾向にあるという近年の傾向を考慮に入れるならば、カーティが指摘するような第4の政党システムのパターンもまた、変化しつつあると捉えることもできる。とりわけ2015年選挙において、伝統的な2か2分の1政党制が復活し、自由党のような全国政党が過半数を得て政権に就いたことは、地域主義によって特徴づけられるような時代の終焉を意味しているのかもしれない。

## 5. おわりに

これまで、1993年の選挙から2015年の選挙まで、選挙結果を中心としてカナダにおける政党システムの変化について考察してきた。1つの結論として、2党制から多党制へ、そして再び2党制へという変化を30年余りの間に経験してきたことが明らかとなった。2019年には再び選挙が行われるが、注目すべき点は、次の2点である。

## カナダにおける政党システム変化の考察

第1に、2015年で10年ぶりに与党となった自由党が引き続き幅広く支持を集められるか否かである。1993年以降、政党システムにおいても地域的な利害の分断を背景とする多党化が継続してきたが、こうした傾向に変化をもたらしたのは、自由党が西部、中央、東部というカナダの3つの主要な地域でバランスよく支持を集めることに成功したからである。従来、地域的な利害が存在するカナダでは、中道型の政党が与党となってきた。そのため、ケベック州で自由党が支持を失い、ケベック連合が再び多くの議席を獲得した場合、政党の数や競合という面においても変化が見られることになる。

第2に、保守党が引き続き、2大政党の一翼としての地位を継続できるか否かである。ハーパーの後を継ぎ、2017年5月に党首となった若手のシーア（Andrew Scheer）のもと、保守党の立て直しを図っており、支持率でも自由党を若干、上回ってきている。一方、もう1つの野党勢力である新民民主党は、支持率が伸び悩んでおり、次の選挙でも「第3党」のままとなる可能性は高い（表5参照）。

したがって、2019年10月に予定されている次の選挙では、政権交代が起きる存在するものの、現状では大きな変動は起きず、政党システムという点でとらえれば、「2か2分の1」政党制が維持される可能性は高いといえる。とはいえ、選挙毎の流動性が極めて高いカナダの特徴を鑑みれば、事前の予測は必ずしも蓋然性を持ちえないため、どのような変化が生じるのかを注意深く考察していく必要があるだろう。

表5 各政党の支持率（2019年3月10日時点）

政党	自由党	保守党	新民民主党	緑の党	ケベック連合
支持率	31%	35%	16%	11%	4%

出典：Abacus Data より作成。<<https://abacusdata.ca/>>

- 1) 近年のカナダにおける政党システムや、その変化も含めた体系的な分析については、次を参照。Richard Johnston, Campbell Sharman (eds.), *Parties and Party Systems: Structure and Context*, UBC Press, 2015; Richard Johnston, *The Canadian Party System: An Analytic History*, UBC Press, 2017.
- 2) ここでいう「選挙」とは、より正確にはカナダの連邦下院議会の議員選挙を意味している。下院の任期は4年であり、例外的な事例を除いて、おおそ4年ごとに選挙が行われてきた。
- 3) 1993年選挙以後、カナダが多党制になったという指摘については、次を参照。Elisabeth Gidengil, André Blais, Richard Nadeau, and Neil Nevitte, “Changes in the Party System and Anti-Party Sentiment,” in William Cross (ed.), *Political Parties, Representation, and Electoral Democracy in Canada*, Oxford University Press, 2002, pp. 68–86; Éric Bélanger and Richard Nadeau, “Political trust and the vote in multiparty elections: The Canadian case,” *European Journal of Political Research*, Vol. 44, No. 1, 2005, pp. 121–146.
- 4) Lawrence LeDuc, Jon H. Pammett, *Dynasties and Interludes: Past and Present in Canadian Electoral Politics (second edition)*, Dundurn Press, 2016, p. 53.
- 5) 進歩保守党は、2003年12月にカナダ同盟（旧改革党）と合併して「保守党」となった。正式名称は、「カナダ保守党」(Conservative Party of Canada) である。なお、カナダは連邦制党の場合、州レベルの政党と区別をつけるため、自由党 (Liberal Party of Canada) のように、党名に“Canada”を加えることが一般的である。本稿では、便宜的に「保守党」と「自由党」という表記で統一している。
- 6) カナダ連邦下院において公式的な政党の地位を得るには12議席必要である。公式的な政党の地位を獲得すると、与党への質問の権利や調査スタッフに対する費用などが与えられる。
- 7) 連邦制をとるカナダは、10州と3つの準州で構成されている。また、国土面積が世界第2位であることから、東西にかけて、その領土はかなり広範囲にわたっている。そこで、主な地域として東部カナダ、中央カナダ、西部カナダという3つの地理的な区別が用いられる。
- 8) こうして特定地域で支持を集める場合は、小選挙区制であっても、結果として多党制となるケースが起ころう。詳しくは、次を参照。木暮健太郎「カナダにおける選挙制度改革の試み—地域主義の顕在化と選挙制度の問題」『カナダ研究年報』第20号、2000年、36–49頁。
- 9) この憲法改正案は、ミーチ湖憲法協定 (Meech Lake Accord) としてまとめられた。その内容は、ケベック条項（ケベック州をカナダにおける独特な社会と位置づけること）の追加、最高裁判所の構成の変更（9人の連邦裁判所判事のうち、少なくとも3人をケベック州から指名できる）といった点を含んでいた。結局、批

准期限の1990年6月になっても全ての州から批准を得ることはできず、廃案となった。

- 10) Thomas J. Scotto, Laura B. Stephenson, and Allan Kornberg, “From a two-party-plus to a one-party-plus? Ideology, vote choice, and prospects for a competitive party system in Canada,” *Electoral Studies*, vol. 23, 2004, pp. 463-483.
- 11) ケベック連合は2011年の選挙で4議席にまで勢力を減少させており、ケベック州においてももっとも多くの議席を獲得してきた地位を失うことになった。
- 12) Jon H. Pammett, Christopher Doran (eds.), *The Canadian General Election of 2004*, Dundurn Press, 2004.
- 13) Jon H. Pammett, Christopher Doran (eds.), *The Canadian General Election of 2011*, Dundurn Press, 2011.
- 14) 広範な視点から2015年選挙を分析したものとして、次を参照。Alex Marland and Thierry Giasson (eds.), *Canadian Election Analysis 2015: Communication, Strategy, and Democracy*. Accessed from <http://www.ubcpres.ca/CanadianElectionAnalysis2015>. また、選挙毎に刊行される体系的な書籍として、次を参照。John H. Pammett, Christopher Dornan (eds.), *The Canadian Federal Election of 2015*, Dundurn Press, 2016. 邦語文献としては、次を参照。木暮健太郎「自由党の復活と伝統への回帰?—2015年カナダ下院選挙の結果から」『杏林社会科学研究』第33巻第4号、2018年、1-17頁；陶山宣明「2015年カナダ連邦選挙の分析」『帝京平成大学紀要』2016年、第27巻、67-77頁。
- 15) Alan Ware, *Political Parties and Party Systems*, Oxford University Press, 1996, p. 162.
- 16) Hugh G. Thorburn, “Interpretations of the Canadian Party System,” in Hugh G. Thorburn (ed.), *Party Politics in Canada*, Prentice-Hall Canada, 1996, pp. 117-127.
- 17) 有効政党数については、次を参照。Rein Taagepera, Matthew S. Shugart (eds.), *Seats and Votes: The Effects and Determinants of Electoral Systems*, Yale University Press, 1989.
- 18) Patrick Malcolmson, Richard Myers, Gerald Baier, and Thomas M. J. Bateman (eds.), *The Canadian Regime: An Introduction to Parliamentary Government in Canada*, University of Toronto Press, 2016, pp. 204-205.
- 19) Mogens Pedersen, N. “Electoral Volatility in Western Europe, 1948-1977,” *European Journal of Political Research*, vol. 7, no. 1, 1979, pp. 1-26.
- 20) カナダにおける政党システムの編成に関する代表的な文献として、次を参照。Lawrence LeDuc, “Canada: The Politics of Stable Dealignment,” in Russell J. Dalton, Scott C. Flanagan, and Paul A. Beck(eds.), *Electoral Change in Advanced Industrial Democracies: Realignment or Dealignment?*, Princeton: Princeton

- University Press, 1984, pp. 402-424; Lawrence LeDuc, Harold D. Clarke, Jane Jenson, and Jon H. Pammett, "Partisan Instability in Canada: Evidence from a New Panel Study," *American Political Science Review*, vol. 78, no. 2, 1984, pp. 470-484; Harold D. Clarke, and Marianne C. Stewart, "Partisan Inconsistency and Partisan Change in Federal States: The Case of Canada," *American Journal of Political Science*, vol. 31, no. 2, 1987, 383-407; Janine Brodie, and Jane Jenson, "Piercing the Smokescreen: Brokerage Parties and Class Politics," in Alain-G. Gagnon, and Brian Tanguay(eds.), *Canadian Parties in Transition: Discourse, Organization, and Representation*, Scarborough, Ont.: Nelson Canada, 1989, pp. 24-44; Harold D. Clarke, Jane Jenson, Lawrence LeDuc, and Jon H. Pammett(eds.), *Absent Mandate: Canadian Electoral Politics In an Era of Restructuring(3rd ed.)*, Toronto: Gage Educational Publishing Company, 1996; Harold D. Clarke, and Allan Kornberg(eds.), *Citizens and Community: Political Support in a Representative Democracy*, Cambridge: Cambridge University Press, 1992; Harold D. Clarke, and Allan Kornberg, "Partisan Dealignment, Electoral Choice and Party-System Change in Canada," *Party Politics*, vol. 2, no. 4, 1996, pp. 455-478.
- 21) Lawrence LeDuc, "Canada: The Politics of Stable Dealignment," in Russell J. Dalton, Scott C. Flanagan, and Paul A. Beck (eds.), *op. cit.*, pp. 402-424.
  - 22) Lawrence LeDuc, "The Canadian Voter," in Robert M. Krause and R. H. Wagenberg (eds.), *Introductory Readings in Canadian Government and Politics*, Copp Clark Ltd., 1995, pp. 369-386.
  - 23) LeDuc, "Canada: The Politics of Stable Dealignment," *op. cit.*, p. 408.
  - 24) Harold D. Clarke, Jane Jenson, Lawrence LeDuc, and Jon H. Pammett, (eds.), *Absent Mandate: Canadian Electoral Politics in an Era of Restructuring*, Gage Educational Publishing Company, 1996.
  - 25) James Bickerton, Alan-G. Gagnon, and Patrick J. Smith (eds.), *Ties That Bind: Parties and Voters in Canada*, Oxford University Press, 1999.
  - 26) R. Kenneth Carty, "Three Canadian Party Systems: An Interpretation of the Development of National Politics," in Hugh G. Thorburn (ed.), *Party Politics in Canada (seventh edition)*, Prentice Hall, 1996. pp. 128-145.
  - 27) ここで登場する保守党は1942年に進歩保守党へと名称を変更し、やがて2004年には改革党と合併し、再び保守党という名称となった。